

マイスコープ

ミヤコドリの観察

新潟市 佐藤 吟一

2008年10月11日(土)に新潟市の海岸でミヤコドリを観察しました。場所は新潟市北区島見浜で、長い海岸線に沿ってゆっくりと探していくと、堤防の上に1羽を発見しました。写真を撮る数枚撮影したところ飛び立ってしまい飛去するのかと心配したところ、近くの波打ち際に降り立ち、砂浜や消波ブロックの上を歩きながら採餌をはじめたので、ゆっくりと観察することができました。ミヤコドリとは初めての出会いで、濃いオレンジ色の嘴がとても印象的でした。想像以上に大きく

小型カモメほどの大きさで、飛翔時には黒と白のコントラストが美しい鳥でした。



コムクドリの生活史を調べる～ 1 ～

新潟市 小池 重人

はじめに

早いもので、コムクドリを調べ始めて30年がたつ。きっかけは学生時代に野鳥サークルで巣箱架けが行事にあったことと、その頃鳥の生活史を調べるのがはやっていたからだと思える。自分にも何か良いテーマはないかとずっと考えていた。学生の頃はセグロセキレイを調べていた。日本にしかないのに、近くの鬼怒川にたくさんいて良いテーマだと思っていたが、巣を探すのが一苦労だった。行動やなわばりについてはまとめてみたものの、肝心の産卵日や子育て記録がさっぱりうまくいかなかった。また、新潟に戻る前に先輩の手伝いで、三宅島のヤマガラウの巣箱調査をした。鬱蒼としたスタジイの森を歩きながら、子供の頃に神社の鳥居の穴に巣づくりしたコムクドリを思い出し、巣箱を使った自分の新しいテーマをぼんやりと思い描いていた。

新潟に戻って最初の年、試しに庭木に2個架けてみたが営巣してくれるか半信半疑だった。5月を過ぎたのに、時折見かけるだけでさっぱり巣箱に入る様子はなかった。しかし、6月に入りしばらくすると1つにコムクドリがやってきて営巣した。これなら何とかかなりそうだと思います、もっと広い場所で巣箱をたくさん架けて調べることにした。そこで翌年海岸の松林に2カ所に分けて、66個の巣箱を高さ2mの位置に木にとりつけた。そして4月に入ると朝や夕方に梯を使い巣箱を調べて回った。1978年、その年初めてコムクドリがやって来たのは4月20日だった。嬉しくなった。この年22個の巣箱で営巣した。今のように遊歩道が完備される前で、静かな場所で毎日コムクドリの調査を続けながら多くの新しい発見に感動していた。調査を終えた後、赤く夕日に染まる日本海を見なが

ら梯を肩に担いで歩いていた。

1. 行動の意味を探る

数年たって産卵日や卵数のデータは集まったが、わからないことだらけだった。特に行動についてのつじつまがよく合わない。そこで観察しやすいように庭にたくさん巣箱を架けて調べることにした。朝の薄暗いうちに起きて2階の窓から観察を始める。1988年、4月10日の早朝、10m離れた柿の木の巣箱にその年初めての雄が渡来した。さっそく調査地図に場所、顔の特徴、行動を記録する。雄は顔の模様がだいぶ違うので、色足輪のない個体も少数なら個体識別ができる。



図1. 巣箱の前で大きな声でさえずるコムクドリの雄

この雄はしばらくして大きな声でさえずり始め(図1)、13日には6個の巣箱を含むなわばりを占有した。2日後の15日には1羽の雌とつがいになり14個全部の巣箱を占有した。しかし20日に別の雄が飛来すると最初のつがいは占有巣箱を4つまで減らし、1つの巣箱に巣づくりを始めた。営巣場所が決まると他の巣箱への関心が減るのだが、すんなり明け渡したわけではなかった。営巣場所をめぐる雄どうしの争いは激しく、近づいてきた雄に羽毛を膨らまして鳴きながら威嚇

し、去らないときは激しく攻撃する。巣穴に止まり黒い口を開け威嚇することもある。時には取っ組み合いもして傷を負う(図2)。この年13つがいになわばりを持ち繁殖した。



図2. 営巣場所をめぐる雄どうしの激しい争い

個体識別しながら、目の前で起こる行動をじっくり見ていると、コムクドリの行動が少しずつわかってきた。最初の頃はいつでも争っているように思っていた。しかし個々の動きをよく見てみると、実際は激しくなわばり争いをした後に一度なわばりが決まってしまうと、となりどうしはほとんど争わなくなるのだった。なわばりは営巣場所を確保するためのもので、餌のための広いなわばりを持たない。そのため、ある程度密集しても繁殖が可能であり200㎡程度のなわばりでも営巣する。密集しても繁殖が可能なこの性質は、少ない営巣場所を効率よく利用することに役立っている。

巣穴を確保した雄は大きな声でさえずる。雌を呼ぶためだ。雌が来ると雄は近づき、翼を下げて体を細くし小さな声で鳴く。巣穴に止まったり出入りしたりもする。青葉をくわえて中に運び込むこともある。コムクドリの雄は自分自身だけでなく好適な営巣場所を確保していることをも雌に示し求愛する。そのような行動もだんだんわかってきた。

2. 個体識別に役立つ、頬の茶色い羽毛

識別に役立つ雄の頬の茶色い羽毛は、小さい斑点のものから斑点というより首全体を覆う

ものまでいる。デジカメで52羽の顔写真を撮った。斑点の小さい方からA～Dと4つに分けるとBタイプが最も多かった(図3)。以前はAが普通で稀にDがいる程度だと思っていたが、中間タイプが多かった。稀に斑点のほとんどない雄もいる。ウグイスなどと違って大きな変異を持つ顔の模様はどんな意味があるのか、今はまだ調査中である。もしかしたら、近所のコムクドリたちはお互いの顔がはっきり区別できているのかもしれない。

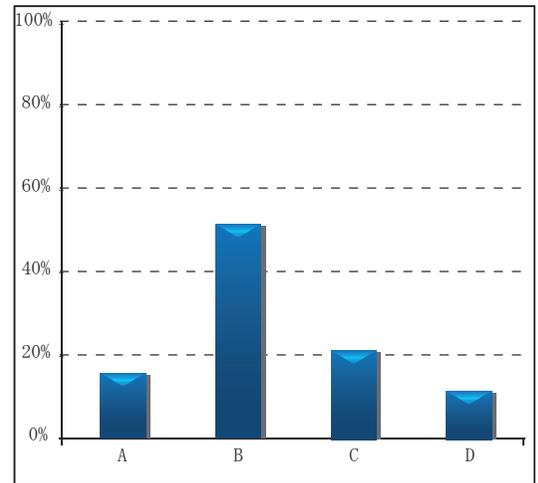
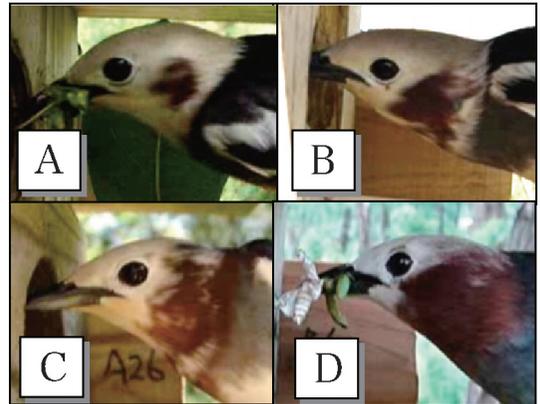


図3. コムクドリの雄の顔の変異

(N = 52, 2006年).

Aは1/4以下、Bは1/3程度、Cは1/2程度、Dは3/4以上が、茶色の羽毛に覆われる。

3. コムクドリのすむ場所

調査を始めて3年目、旧上川村に転勤に

なった。翌年に校舎の2階に巣箱を数個架けたところ1つだけコムクドリが営巣した。上川村では今まで繁殖はおろか全く記録がなかった。適切な環境と営巣場所があれば繁殖するのだ。コムクドリは上川村のように深い森林が大部分を占める山地にはすみにくい。森で餌をとるのがヤマガラやキビタキなどよりも下手なのだ。けれど、たとえ山地でも牧場や高原のような草原と林がモザイク状に広がる開けた環境に営巣できる穴があれば繁殖できる。そのような環境には競争相手がすみにくい。笹ヶ峰牧場のような標高1300mの山地でも繁殖が確認されている(図4)。また、河原の林、樹木が多い集落、海岸の林にも繁殖するが(図5)、このような場所は山地の森林と比べてやはり競争相手は少ないようである。



図4. コムクドリが繁殖する笹ヶ峰牧場。中央の古木で営巣している。(2007年)

4. ムクドリとの争いと、コムクドリの保護

ムクドリとの巣穴をめぐる争いは激しい。ムクドリは直径約4.5cmの円よりも大きい穴だと入れる。大きい巣穴はムクドリがのつとるので、コムクドリは直径3.6～4.4cmくらいの狭い範囲の穴でしか営巣できない。アカゲラは冬に枯れ木に穴を掘るが、その穴は大きいのでムクドリが入る。コゲラの穴は小さすぎる。だから自然では木に空いた少数の裂け目ぐらいしか残されていない。コムクドリが少ないのはそれが原因だと思われる。増やすするには開けた林に巣箱を架ければよい。新たな地域に多くの巣箱をかけて少数が繁殖し始めると、雄のさえずりを聞きつけ他の雄も雌も集まってくる。何年かするうちにその地域はコムクドリであふれてくるのである。



図6. 自然樹洞で営巣するコムクドリ



図5. コムクドリが繁殖する海岸林の環境。左と中央は架設した巣箱(2008年)

参考文献

- 小池重人. 1988. コムクドリの繁殖生態. Strix 7: 113-148.
- 小池重人. 1997. コムクドリ. 日本動物大百科 Vol. 4, 鳥類 II: 164. 東京: 平凡社.

高山鳥を撮る

阿賀町 渡部 通

高山の鳥は、低地（平野部）の鳥に比べ、より厳しい山岳環境に適応しながら生活しています。そんな山岳地帯でしか見ることのできない高山の鳥に出逢えた時は、言葉に表せないほど大きな感動を覚えます。高山の鳥といえば、即座にライチョウを思い浮かべるほどポピュラーな存在ですが、この他にも本州の高山帯に生息する鳥類は、およそ10種類が知られています。今回、本州各地の山岳に出かけた際に、シャッターチャンスにめぐり逢えた高山鳥のひとつを紹介しましょう。

1. ライチョウ

本州の脊梁山脈とされる北アルプスと、南アルプスを主な生息域としており、新潟県内では、火打山と焼山で生息が確認されています。これまでの山行で、ライチョウを確認したのは、常念岳、蝶ガ岳、燕岳、大天井岳、白馬岳、小蓮華山、雪倉岳、朝日岳、立山、薬師岳（以上、北アルプス）の各山岳であり、県内の山岳では、火打山で観察することができました。6月中旬の白馬連峰を縦走した際、ガガッ、ガウー、ガウーと濁ったきしむよう



図-1 喉を膨らませて鳴くライチョウの♂成鳥（白馬連峰、三国境付近：6月中旬）

な声が聞かれ、直感的にライチョウを連想し、その方向を見ると、岩の上に座っている成鳥を発見しました。近くに♀がいるらしく、♀のほうに向かって、盛んに喉を膨らませて鳴いています。始めて聞くライチョウの声は、およそ鳥とは思われないような感じでしたが、神秘性が漂っていました。ライチョウの観察できた場所は、いずれも高山帯のガレ場であり、乾性お花畑とハイマツが生育している環境でした。

常念岳と小蓮華山、薬師岳、火打山ではヒナを連れて歩く♀親を確認しましたが、ヒナは3～5羽の場合が多く、登山道近くの砂礫原で♀親が砂浴びをすると、ヒナが次々と真似て砂浴びを始める光景は、微笑ましさを倍増させてくれました。



図-2 ガレ場に現れた♀（常念岳、8月上旬）

2. ホシガラス

キタゴヨウとハイマツが生育している山岳であれば、必ずといってよいほど観察できる鳥といえるでしょう。ガアー、ガアーという濁った声は、遠方からでも良く聞き取れますが、ホシガラスの声により、標高を稼いだことを知ることができます。写真は北岳（飯豊連峰）の稜線を登高中、ハイマツ林に飛来したのですが、根元には沢山のハイマツの

実が集められており、ホシガラスはハイマツの実が好物であるらしいことが分かりました。常念小屋（北アルプス）のテラスで休憩していると、近くの林にホシガラスが飛来し、その様子を見ながら飲むコーヒーの味は格別でした。この他に観察できた山岳は、御神楽岳、吾妻連峰、磐梯山、越後三山、平ヶ岳、会津駒ヶ岳、燧ヶ岳、至仏山、北アルプス（蝶が岳、白馬岳など）、中央アルプス（木曾駒が岳）、南アルプス（北岳）などでした。



図-3 ハイマツ樹海に飛来したホシガラス（飯豊連峰、北股岳：8月上旬）

3. コマドリ

6月中旬の火打山に向かう富士見平の下部は、一面が豊富な残雪に覆われた状態。ダケカンバ林はようやく芽吹きが始まったばかりで、早春の雰囲気そのものです。休憩していると、ヒガラ、コガラ、ウソ、キクイタダキ、ミソサザイ等のさえずに混じって、針葉樹林の奥からコマドリのヒン、カララ…というさえずりが響いてきました。ゆっくり声のほうに近づくと、ダケカンバの横枝上に止まって囀るコマドリ♂を発見。私たちの接近を警戒することもなく、嘴を大きく開いて、ヒン、カラララ…と歌い続けます。本格的なさえずりではないものの、身体の奥深くまで響くような素晴らしさでした。囀りの最後の部分で、尾羽を広げながら鳴くのがよく分かりましたが、胸から頭にかけてのオレンジ色が、うす暗い針葉樹の森の中で、実に鮮やかでした。囀りの様子と姿をじっくり見れた感動は、今



図-4 口を上げて囀るコマドリ（火打山、富士見平付近：6月中旬）

でも忘れることができません。

5. イワヒバリ

高山鳥の中で、最も標高の高い場所に生活する鳥で、名前のとおり岩稜地帯を生息域としています。夏期に飯豊連峰を歩いていると、飯豊本山や北股岳のガレ場で、餌を探しながらチョコ、チョコ歩いている光景をよく見かけることがあります。また、南アルプスの北岳の山頂に続く岩場を歩いていたら、私たちの目前にある岩の上で止まっていたり、数羽が追いかけてこをするように飛び交う様子が頻繁に観察できました。一方、越後駒ヶ岳の駒ノ小屋に泊まった翌朝、背後にある岩場からイワヒバリのさえずりを聞くことができました。朝の陽光を浴びてさえずる様子は、その日の晴天を約束してくれるかのように、谷全体に響き渡って、清々しきでいっぱいになりました。



図-5 岩場で休むイワヒバリ（南アルプス、北岳山頂付近：8月上旬）

高田公園でのコムクドリの巣箱による繁殖

上越市 山本 明

はじめに

コムクドリの繁殖生態については、当支部会員の小池重人氏がこれまで数十年にわたって研究し、日本野鳥の会の研究報告 Strix にその成果を詳細に発表しているほか、当「支部報」や「野鳥新潟」にも報告している。

私も上越市の高田公園で、1992年から2002年まで11年間巣箱を架設してコムクドリの繁殖を観察した。樹洞営巣のこの鳥について、初めは高田公園で樹洞のある木が少なくなってきたので、巣箱を取り付けて繁殖を助けてやろうというくらいのつもりだった。しかしせっかく架ける巣箱だから、中を覗いて観察してみようという気になって記録をとってきた。従って個体識別等をして丹念に観察したわけではないので、雑駁な面があるが一応まとめてみたので報告する。

なお、巣箱の制作にあたりその費用の一部を当支部より助成を受けた。

巣箱架設場所

最初3年程の架設場所は試行的に城跡土塁の林や桜の木にバラバラに取り付けた。しかしよく蛇が入ったり、利用されなかったり、果ては巣箱までなくなってしまうこともあった。それでなるべく近くに集中しようと、4年目からは市営の相撲場の周りを囲んだ土盛り上のサクラの木に取り付けることにした。この土盛りの高さは2m余り、囲みの直径はおよそ40mである。そこに大小のサクラの木20本が3.7m～9.5m間隔で生育している(図1)。このサクラの木にはほぼ等間隔で、地上4～6mの所に、15個の巣箱を取付けた。狭い縄張りを持つコムクドリでは、これだけの間隔があれば営巣に支障はなく、ここでは巣箱が全部利用され、蛇が入ったのは1度だけだった。



図1 コムクドリの巣箱架設場所(高田公園相撲場の周り)

初卵日と一腹卵数

初卵日は雌が一腹卵数を最初に産む日を表し、それぞれの年の最も早い初卵日は図2のようであった。初期の頃、小池氏に高田の方の初卵日を知らせたところ、新潟より早いようだと言われた。高田の方が少し南に位置して、新潟より渡来が早いこともあるのかも知れない。図2で2002年はこれまでになく早い初卵日であった。

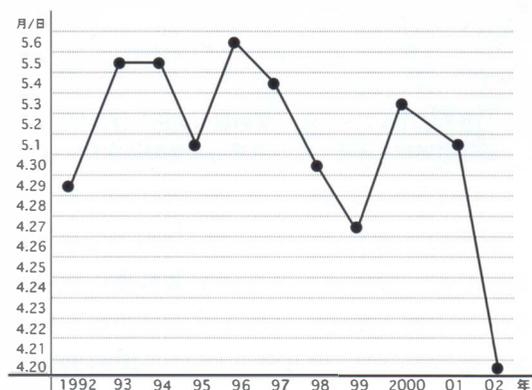


図2. コムクドリの各年の初卵日(高田公園巣箱)

小池氏も新潟で初卵日が早くなっている傾向を確認し、これは地球温暖化の影響と指摘

している。こちらでも2003年以降も続けていけば、もっとはっきりした傾向を把握出来たかも知れない。

次に一腹卵数であるが、コムクドリではペアになっていない雌が卵を産みつけることがあり(加入卵という)、慎重に観察しなければ一腹卵数は特定できない面がある。私の扱った巣箱でも明らかに大きさの違う卵(加入卵)が入っている例も幾つか見ている。また普通雌は1日に1個しか産まないが、大きさの同じ卵が1日に2個産んでいたことがある。これも加入卵であろう。加入卵のためか、1巣に8卵、9卵というのも1例ずつあった。明らかに加入卵と思われるものを除いた一腹卵数を示すと図3のようであった。

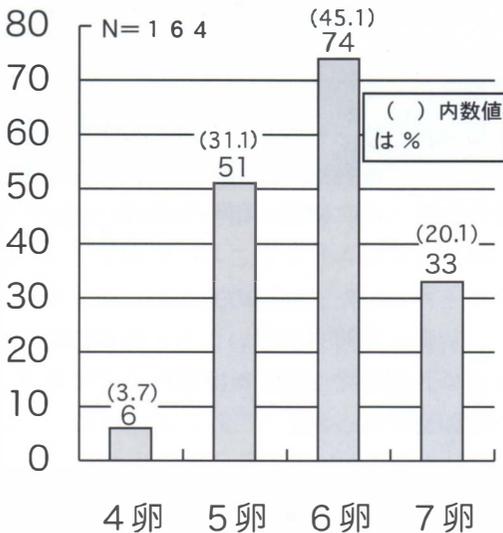


図3 コムクドリの一腹卵数(高田公園巣箱)
(産卵の途中で消失したり放棄したものは含めない)

新潟の小池氏が1978,79;1986~88年に集計した一腹卵数では5卵が最も多く、次に6卵、4卵の順で、3卵と7卵は少ない結果となっていたが、93年以降は一腹卵数の平均値が6卵近くに増加しているという。これも温暖化によるものであろうが、1992~2002年の高田公園でもその傾向が反映しているようである。

孵化率と巣立ち率

孵化率とは産卵数に対して孵化したヒナの数の割合であるが、無精卵があったりして産卵数全部が孵化することはごく少ない。1つの巣で孵化しない卵は1~3個あり、1個が最も多く次に2個で3個が最も少なかった。

その年に利用した巣箱全体について、産卵数と孵化数を集計して算出した孵化率は図4のようであった。



図4. コムクドリの孵化率と巣立ち率(高田公園巣箱)
(産卵後や抱卵中に孵化せずに消失したり放棄したものは含めない)

孵化したヒナがそのまま育って全部巣立つことは稀で、相当数が死んだり、天敵に襲われたりして減ってゆく。ここではその年利用した巣箱全体の産卵数に対して、巣立ったヒナ数(合計)の割合を巣立ち率として算出してみると図4のようになり、当然孵化率より低い。最初の3年はその後の8年より低いのは、前述したように、公園内のあちこちに分散して巣箱を架けたので、アクシデントが多く巣立ち率は低かった。

表1. 一腹卵数による孵化率と巣立ち率

一腹卵数	繁殖巣数	孵化率	巣立ち率
5卵	40	84.5	64.0
6卵	66	81.0	60.4
7卵	33	80.5	60.6

他に4卵の巣が5例あったが、例数少ないので掲げなかった。また産卵したが孵化しなかった巣は除いた。

なお、1腹の卵数に対しての孵化率と巣立ち率をみると、4卵の巣が最も高かったが、例数は少ない(5例)ので対象外とし、5卵、

6卵、7卵の巣では5卵が少し高かったものの、それ程変らなかった(表1)。

天敵と繁殖成功率

天敵はヘビが多い。それも殆んどアオダイショウである(図5)。最初の3年は人通りの少ない所に架けたので、よくヘビに入られた。ヘビはヒナが大きくなって巣立ちも近い頃によく入る。その時期を待っていたかのように、ヘビの感知能力はすごいものだ。ヘビは巣箱の出入りの孔から入って、おそらくヒナを全部飲み込んでしまうのだろう、腹がパンパンに膨らんで孔から出られず、飲み込んだヒナが消化するまで1週間ほど巣箱の中に滞在している。



図5. 巣箱に入ってヒナを飲み込んだアオダイショウ

卵がある日全部なくなっていることや、ヒナがある程度育った頃、全部いなくなることも多かった(表3)。襲ったものは何者か、その正体は分からない。巣箱はカラスにはやられないようにできている。あるいはイタチのような肉食獣だろうか。小池氏によれば、卵などはペアでない他のムクドリが持ち出すこともあるという。

ともあれ、営巣した巣箱からヒナが1羽でも巣立った巣箱を繁殖成功巣とし、巣造りだけして放棄した巣箱も含め、営巣巣箱全体に対する割合を繁殖成功率として、11年間をみると表2のようである。前の3年はあまりに低いので後の8年と分けてみた。後の8年は最も低いでも巣箱15中11の成功、あ

る年は15全部が成功したこともあった。

繁殖不成功の原因をみると表3のようであった。やはり卵やヒナが天敵等に襲われて

表2. 巣箱による繁殖成功率(高田公園)

年	営巣数	成功巣	成功率
1992～1994	44	18	40.9
1995～2002	120	104	86.7

消失し放棄するものが多い。なぜか産卵途中で、また抱卵中に放棄した巣があった。ヘビなどの出現におびえたのであろうか。

表3. 繁殖不成功の原因

原因	巣の数
・巣造りだけで放棄	1
・産卵の途中で卵が消失	6
・産卵したが途中で放棄	1
・抱卵中に卵が消失	3
・抱卵中に放棄	2
・孵化後ヒナが消失	17
・孵化後ヒナが死亡	3

一つの巣で失敗した後、また産卵して繁殖を試みたのが3例あった。何れも産卵後や孵化後に消失したり放棄されたりして、成功しなかった。この後の方の繁殖は同じペアなのか別のペアなのか、個体識別してなかったので分からない。また6卵を生んで5羽のヒナが巣立った後、また4卵を産んで抱卵していたが、途中で放棄した巣があった。これは前と後で明らかに別のペアと思われる。

餌とした桜の実

高田公園にはソメイヨシノを主とした3000本余りのサクラの木がある。ソメイヨシノは実をつけることはごく少ないが、他に実をつけるサクラの木も少し成育している。コムドリの巣立った巣箱の中には多くのサクラの種子が残されていた。これは親鳥がサクラの実をヒナに与えて、ヒナは外側の柔らかい部分(しょう果)を消化して、種子を吐き出したものである。雑食性のコムドリは勿論親鳥もサクラの実を食べている。

このサクラの種子がどのくらい巣箱の中に



図 6.1996 年 N4 の巣箱から取り出した桜の種子 (1613 粒)

あるのか、1994～96年と2000年の巣箱から取り出して数えてみた。一つの巣箱の種子数と巣立ちヒナ数を表4にまとめてみた。巣によって種子数に相当の開きがあるが、傾向としては巣立ったヒナの多い巣は、種子の数も多いようだ。しかし巣立ったヒナが多いのに種子数の少ない巣もあるのは、サクラの実を多く運ぶ親鳥と、少ししか運ばない親鳥がいることを窺わせるものである。2000年はそれが顕著に現れているようである。また、1995年は各巣箱に多くの種子が入っていたが、2000年は少ない巣箱が多かった。これはサクラの実の豊作と不作があるからだろうか。

表4で1995年のN3は抱卵中に卵が消失して、繁殖失敗した巣であるが、214粒の種子が入っていた。これは雌雄交代で抱卵する親鳥が、それぞれに吐き出したものであろうか。

ともかく、繁殖期間中の高田公園のコムクドリの餌は、相当量をサクラの実に依存しているものと推定される。

(この項、中村雅彦監修、上越鳥の会編著「雪国上越の鳥を見つめて」-新潟日報事業社刊-にやや詳しく記述し掲載した)

引用文献

- ・小池重人 1982：コムクドリの育雛の様子．日本野鳥の会新潟県支部報 No.13
- ・———1988：コムクドリの繁殖生態．日本野鳥の会研究報告 Strix Vol. 7
- ・小池重人・樋口広芳 2006：気候変動が同一地域の鳥類、昆虫、植物の生物季節に与える影響．地球環境 vol.11No.1 (社) 国際環境研究協会
- ・朝日新聞 2007.5.22(新潟版)：コムクドリ 早まる産卵

表 4. コムクドリの巣箱内のサクラの種子と巣立ちヒナ数 (高田公園)

	1994 年		1995 年		1996 年		2000 年	
	種子数	巣立ちヒナ数	種子数	巣立ちヒナ数	種子数	巣立ちヒナ数	種子数	巣立ちヒナ数
N 1	—	(繁殖不成功)	1376	5	1437	6	△	3
N 2	—	(繁殖不成功)	1057	4	△	(繁殖不成功)	△	5
N 3	—	(繁殖不成功)	214	(繁殖不成功)	775	4	914	5
N 4	—	(繁殖せず)	950	3 (←5)	1613	6	△	3
N 5	—	(繁殖不成功)	1266	6	1537	6	1291	4
N 6	—	(繁殖不成功)	119	3	△	3	1904	6
N 8	557	3 (←4)	1063	5	809	6	△	6
N 9	—	(繁殖不成功)	1084	4 (←5)	△	0 (←4←5←6)	△	6
N10	803	3 (←4)	1125	5	△	(繁殖不成功)	△	5
N11	600	(4, 巣立ち前捕食)	1253	5	548	3	△	2 (←3)
N12	1147	5	1324	4 (←5)	787	3 (←5)	△	3
N13	1236	5	1196	5	1114	6	△	5
N14	—	(繁殖不成功)	1314	4	679	3 (←4)	1013	5
N15	—	(繁殖不成功)	1363	5	△	6	△	2 (←3)
N16	—	(繁殖不成功)	829	5	△	0 (←3←4)	△	2 (←4)

【注記】 1. 巣箱の N 7 は欠番 (初期に行方不明)

2. 1996 年と 2000 年の種子数欄の△は、巣箱内のサクラの種子が少なく数えなかったもの

3. 巣立ちヒナ数で、例えば 3 (←4) とあるのは、4 羽いたヒナが途中でまたは巣立ち近くで死亡して 3 羽となったことを示す。

4. 繁殖不成功は途中で卵やヒナが消失していたり (捕食によるものか?)、ヘビが入って捕食されたもの。

KODOMO ラムサール湿地交流 in にいがた報告

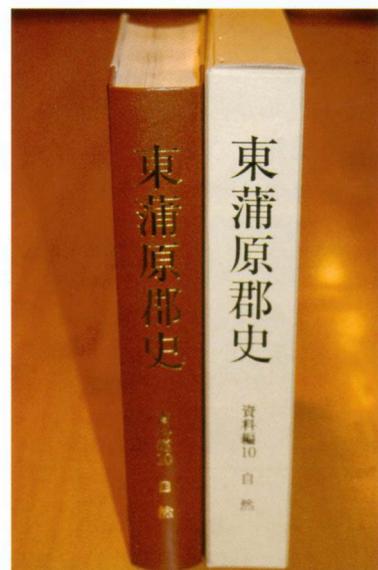
8月20日(水)から24日(日)までの5日間、「KODOMO ラムサール湿地交流 in にいがた」が新潟市で開催されました。県内各野鳥の会、自然保護団体と新潟市、新潟県、環境省などの行政、そしてラムサールセンタージャパンがそれぞれ実行委員となって、企画から運営まで協力して行った国内で初めての国際KODOMO ラムサール湿地交流となりました。ロシア、韓国、中国、タイ、インド及び国内ラムサール登録湿地で活躍する子供たち約70名が福島潟にある菱風荘に宿泊し、越後平野の4湖沼(鳥屋野潟、佐潟、瓢湖、福島潟)を訪ね、野鳥観察やハス刈りなど体験を通して湿地について学びました。その後グループに別れて各地の活動を報告し合い、湿地保全にむけて自分たちに何ができるかを真剣に話し合いました。23日は朱鷺メッセの大会議場で活発な討議を重ね、「湿地がある 命がある ぼくらがつなげて宝になる」というメッセージを決議しました。この新潟発のメッセージは、10月に韓国・チャンウォン市で開催されるラムサール COP10 でアピールされることになりました。次代を担う子供たちのこれからの活躍に期待したいと思います。(岡田成弘)



写真:佐潟でハス刈りを楽しむ子供たち (撮影:小川龍司)

「東蒲原郡史 資料編 10 自然」 発行

本会評議員である石部 久さん(東蒲原郡阿賀町)が鳥類について執筆した「東蒲原郡史 資料編 10 自然」が発刊されました。以下に平成20年10月12日付新潟日報の書評「にいがたの一冊」(藤沢 周 氏)より抜粋して紹介します。『・・・頁を繰れば、頭上に鳥影が過ぎたかと思えるほどの迫真性のある写真。イヌワシである。ハヤブサである。クマタカである。阿賀野川上空を斜めに交差して戦うイヌワシとハヤブサの鋭利な残像の感触さえももたらす写真と叙述にも、また調査にあたった方々の並々ならぬ熱と執念を覚えるのだ。頁を繰っていくうち、この調査にかける熱は、つまり郷土への愛なのだと思づく。東蒲という土地への愛情が、その肌理の一つ一つまでに注がれて、書物の形となった。「自然」の百科全書であると同時に、郷土への慈しみに溢れた稀有なる「郡史」でもある。』9年以上をかけて調査し、豊富なデータ、写真とともに解説している900ページに及ぶ大作です。是非ご覧ください。(事務局)



問い合わせ: 東蒲原郡史編さん室
(電話 0254-92-5614)、定価 5,000 円。

上越鳥の会 20 周年記念刊行！

豊かな自然とはっきりした四季をもつ上越。そこで生活する野鳥について上越鳥の会の会員と上越教育大学の学生(当時)が粘り強く観察を行った。

上越で観察された野鳥の生態をイラスト、図表を豊富に使い分かりやすく記した観察記録。各章に口絵、コラムが入って楽しい本文構成、やさしい文体なので読みやすい。

[刊行本の紹介]

「雪国上越の鳥を見つめて」

上越鳥の会(代表中村雅彦上教大教授)では、先頃、発足 20 周年を記念して、標記の本を刊行しました。1994 年に刊行した「雪国上越の鳥」の姉妹編ですが、今回は A5 版としてカラー写真は各章折込みで 18 頁 62 点と少なく、記事とコラムを主として編集されています。その中にモノクロ写真も多く載せてあります。記事は上越鳥の会会員だけでなく、上教大の動物生態学研究室 OB の修論や卒論の一部も、優しく解説して載せてあります。企画から 5 年の歳月をかけて完成しました。全体で 382 頁あり、読み応えがあり、きっと野鳥愛好者の参考になるかと思えます。定価も 1500 円という格安ですので、是非購入してお読み下さい。主な書店にあります。

(上越鳥の会事務局 山本 明)

雪国上越の鳥を見つめて

監修/中村雅彦 編著/上越鳥の会

● A5 判/384 頁/ISBN 978-4-86132-236-5

◎定価 1,500 円(本体 1,429 円+税)



雪国上越の鳥を見つめて

中村雅彦監修 上越鳥の会編著

鳥は環境の鏡。

鳥を通して上越の自然環境の過去、現在、

そして未来を知る。

四季おりおりにさまざまな鳥類を見せる上越の鳥たち。
上越鳥の会と上越教育大学の学生が地元で粘り強く観察した野鳥の生活を紹介。

新潟日報出版

発売：新潟日報事業社 出版部/〒951-8131 新潟市中央区白山浦 2 丁目 645-54
TEL025-233-2100 FAX025-230-1833
<http://www.nnj-net.co.jp/> hanbai@nnj-net.co.jp
新潟日報事業社にお申し込みいただいた場合は送料別途(新潟県内 300 円)頂戴いたします

発行	2008年10月30日	No.66
発行人	大島 基	編集者 小林成光、浦部良雄、千葉 晃
事務局	日本野鳥の会新潟県支部 〒950-0941 新潟市女池 3 丁目 13 番 25 号 TEL 025-285-2405 本間由紀子方 <振替口座> 00610-1-6002	